

江戸期の版本に描かれた遍路の姿 —『予州安西法師往生記』を中心に— The Pilgrimage as Seen in Wood-block Book Illustrations from the Edo Period

福田安典
Fukuda Yasunori

There are surprisingly few examples of illustrations of pilgrimage in wood-block books (printed materials) from the Edo period. In particular, there are no reported examples from the early and mid Kinsei (Early Modern) period, a topic of interest in the field of pilgrimage studies.

There was a man named Ansai. His secular name was Muramatsu, and he was a fisherman born in 1640 in Okura, Uwabe County, in Yoshū. As he wished to take the tonsure, he did not marry. His father died when he was nineteen, and his mother when he was thirty-four. Six years after her death, he made the Shikoku Pilgrimage and entered the temple of Jueiji, a temple in Ōzu that was a subordinate of the Jōdō sect temple Chion'in, as a priest named Ansai under the instruction of Koyo. He was forty-four years old at the time. Later he lived at Honseiji, a subordinate temple of Jueiji. In the third month of 1709 he had a prophetic dream and predicted his death. On the fifteenth day of the third month of 1710 he died according to his prediction. The tale of his death quickly spread to Kyoto, and was published in 1712 as Chronicle of the Blissful Death of Priest Ansai by Ninchō of the Chion'in in Shishigatani. (In fact, it was written down at Ninchō's study center Byakurensha by a Shishigatani disciple named Ryua.) Next, the tale was published by the temple of Kanchi'in in Hikone. Then, in 1815 it was reprinted by Hōgan and Hōjū from the temple of Saienji at Ōhibi in Choshū. Again, in 1840 a third printing was issued by the temple of Zōjōji, as publication continued for a long time during the Edo period.

As an illustration for this Chronicle of the Blissful Death of Priest Ansai, there is what appears to be a portrayal of Ansai on the Shikoku Pilgrimage. However, this is ultimately only a "possible explanation," and it cannot definitely be said to be a portrayal of pilgrimage. If it is a portrayal of pilgrimage, it is remarkable as an early example in print. And it is valuable not only as printed material. Ansai made the Shikoku Pilgrimage in 1680, and it has significance as evidence of pilgrimage at that time. Thus careful discussion and treatment are needed of the illustration introduced in this presentation.

遍路の姿が江戸期の版本（印刷物）に描かれる例は少ないのであろうか、多いのであろうか。よく知られたものとしては十返舎一九の『金草鞋』がある。その他、遍路の案内書として刊行された物や一枚刷りなど未発見のものを含めればそれ相応の量になるであろうという予想を仮に立てるとすれば、その予想はまことに楽観的で、的を射ることはないであろう。なぜなら遍路の姿が描かれる、描かれないの問題以前に、遍路自体が扱われる印刷物が一九の例に象徴されるように圧倒的に江戸後期に集中しているからである。そこに遍路がいつ始まったのかという問題、いつから流行したのかという問題などが絡まり、楽観的な見通しを持つような現状ではない。まずは、近世初期から中期の印刷物から遍路の姿を探る必要がある。

江戸期に伊予大洲に安西という法師がいた。その往生を記した『安西法師往生記』（以下、『往生記』）は、正徳二年に京都版、文化十二年に長門版（出版は京都）、天保十一年に江戸版、その後印本が嘉永元年、大洲版が安政六年、といった風に、複数の地域を含みながら長く出版された書物である。その書の中に、江戸期の遍路の姿として注目される挿絵がある。

この『往生記』の挿絵として、安西が「四国を巡礼した姿」が描かれている。これを遍路の姿が出版物に掲載された早い例とみなしてよいのであろうか。また、安西の巡礼が遍路であるとすれば、これは単なる印刷物の例としてのみ貴重なのではない。安西が四国遍歴をしたのは延宝八年であるが、この時期の遍路の証言としても意味があろう。また、長門西円寺の法岸も安西を慕って遍路をしている。法岸二十一歳の時（明和元年頃）である。この事実も遍路研究においては知られていない。

本稿では、如上の問題意識に沿い『往生記』の挿絵を取り上げて考察してみたい。なお、『往生記』の出版については以前書いたことがあるが（「夢を見ることを忘れた頃に—安西法師の奇蹟—」、『詞林』44号、

2008年10月、大阪大学古代中世文学研究会)論の進行上一部重複して論じることをお許し願いたい。

1 安西法師の物語

安西は『往生記』の伊予大洲版（幕末頃か）によれば俗名は村松、寛永十七年生れ、予州宇和郡奥浦の人で、漁師であったが、出家の望みがあったために、妻を迎せず、十九で父を亡い、三十四に母を亡った。母七年忌に「四国巡礼」をし、大洲寿永寺に入り、高譽を師として出家、安西と号した。この時四十歳。後に寿永寺の末寺、中村の本誓寺に住持する。本誓寺には慈覚大師御作の阿弥陀如来像があった。安西はもとより文盲であったため、回向の際にも俗名で「何右衛門、何兵衛、何信女」などを「平にとなへて、聞をも恥じず、回向するさま、思ひ入りたる実のすじ」のある僧であった。日々、念佛の行者として尊敬されていた。

宝永六年三月、七十歳となった安西は寿永寺の光譽、大蓮寺の誓譽その他を招いた。その理由は、安西が見た「靈夢」にある。ある夜、夢に阿弥陀如来が現れ、安西を極楽浄土へと誘った、とのことであった。この靈夢を得てますます欣求の念が募った安西に次の奇蹟がおきる。同年十月に、阿弥陀本尊より「來年寅の三月十五日、巳午の間に、病患もなくかならず浄土へむかへするぞ。敢て疑ふことなけれ」という再度の夢の告げであった。原文には、

同四日といふに、寿永寺に行く。「しかしかの御示現あり」と、往生の期を語り出るに、寿永寺及び城下の人々、直に聞き、伝て聞くも、敢てこれを信せず、「何事をいふやらん」と嘲り笑ふ族もあれど、

と記される。近世期では安西の靈夢はもはや荒唐無稽な話と受け止められてしまった。

安西は、それでも気にせずたゆみなく念佛していると、三度目の靈夢に出会う。その年の十二月晦日の通夜念佛の時に、まどろみの中で本尊の声がする。「汝、來年三月十五日、巳午の中間、時日たがはずいよいよ迎へん。諸人は聞いて疑ふとも、汝は信を堅ふせよ。兼て期を示し、大往生をなさしむるは、諸人に念佛を勧めん為ぞ。今とやかくの疑ひは、往生だにもしほせば、をのづから散すべき也。そのときの為にてあれば、今夜の告げも、遠慮なく人々に語りをけ」という。安西は翌日、元旦にも拘わらず大蓮寺の誓譽上人のもとに走り、その告げを語り、そのまま大洲城下に出た。人々には安西のふるまいは狂乱としか思えなかつた。しかし、安西は気にせず、自らの葬送の用意を整えていく。そのありさまは周囲には奇異に写り、誓譽上人でさえ、

「むかしより夢中の感を容易に人に説かざることは、仏祖の深き制諱なり。殊に夢には虚実あり。汝、漫りに説くをもつて、人あへてこれを信ぜず。却て狂乱のわざと嘲ける。其上わ僧、起居飲食、常に異なる事なし。身躰ともにすこやかに、聊かの病苦なければなんぞ容易く往生を遂げられん。疑ふらくは、若し捨身往生ならんか」

と言ひ出す。しかし、安西は気にせず、いよいよ三月十五日となつた。この時に及んで、世上の噂を抑えることが出来ず、事の真相を見極めるために、法類を排除して、公儀よりの検使の前で、三月十五日を迎えることとなつた。検使の名は、城主よりの目付として青野喜左衛門と永井新蔵、代官の菊原権七、その外に和田伊左衛門、鈴木金七、岡本治兵衛、林金八等。居並ぶ、袴姿に帯刀の武士達の前で、見事に安西は往生を遂げた。その様は、

此時歓喜面にあふれ、身躰踊躍の躰にして立ちながら「ややしばし。諸人と共に念佛し」とばかりありて席につき、跏趺座して合掌し、独り高声に「南無阿弥陀仏」と聞こゆる事、二返して、其の三返に至るゝ。低しきけば息絶ぬ。時に春秋七十一歳。顔色咲むがごとくにて、合掌すこしも乱れねば、検使方より「其の往生の実否を糺し明らめん」と脈をとり、様子を伺ひ、大に驚き、参詣の諸人に向かひ、

「安西坊こそ、只今正念往生」

と、大音声も以てよばはり給へば、覺へずしらず。「わ」と一同に嗟嘆のこゑ、念佛のこゑ、讃美のこゑ、響きを続いて久しく止まず。その中にははじめより信ずる人はおもひし事よと感涙を面にそそぎ、元來も疑ふ人は、「さはしらざりき。ゆるし給へ」と慚愧の袖を一時にしぶり、

というものであった。

いくつかの注釈を施せば、大洲寿永寺は大乘山寿永山、浄土宗知恩院末。天明二年の大火で焼失したのでそれ

以前は不明。「寺伝によると、源頼朝が二僧を伊予につかわして上浮穴の頼朝寺とこの寿永寺を建立させ、それが寿永年間（一一八二——一八四）であったところから寿永寺と称したといい、その創建は古いとされている。この当初の開山は義圓と伝えられる」（『大洲市史』）という記事がある。文中の高譽は寿永寺十世、光譽は不詳。

本誓寺は大洲市中村。寿永寺第五世学譽景光（一六五六寂）が創建した寿永寺の末寺。本尊の阿弥陀如来像は慈覚大師作と伝えられ、大洲市の文化財。現在は安西堂が残るのみで、四月一五日には法会がある。阿弥陀如来像、及び『安西往生図』は本寺の寿永寺が管理している。大蓮寺は「大蓮寺の誓譽上人 名ハ利億」とある。大蓮寺は明治になって廃寺となり、寿永寺に統合された。この誓譽が安西の往生伝を知恩院に伝えた人物として注目される。大蓮寺は元禄四年に寿永寺十世高譽利夫によって開山された。

『往生記』に見える検使役は藩記録『大洲旧記』に見えることが小島泰雄師「近世往生人「安西大徳の愚鈍念佛」一奇蹟以上のもの」（平成十四年三月『佛教論叢』四十六号）に指摘がある。この『往生記』の最大の特徴は、ここに実在の武士名が記されることである。江戸期における武士階級を検使役としたことで、この安西の物語は単なる物語ではなく「事実」として証明されることとなったのであり、そのインパクトは後述するようにとても強いものである。

2 安西伝の出版 その一 京都獅子谷法然院周辺

安西法師脱白の因由、臨末の祥瑞、予州大蓮前住誓譽上人の親しく観る所なり。復た以て後世に伝ること無きことを慮りて特に獅子谷に来て吾が先師忍老和尚に告ぐ。先師、坐脱自在なるを感喜してその記く（文化版では「を」）為さんと欲し、疾て未だ果たさず。滅度に垂たる時乃ち門人龍河に嘱して記せしむ。河、聞くに隨え隨て録す。

（正徳二年版『予州安西往生記』より、原漢文、用字は適宜改めた）

この安西の往生は大蓮前住誓譽によって京都獅子谷の忍老和尚（忍激）に伝えられた。忍激は正保二年生。江戸増上寺で出家し、延宝九年に鹿ヶ谷に法然院を建立し、道場とし、公家、将軍家からの帰依を受ける。法然院の明版『大藏經』と建仁寺の高麗版との校訂に努めたことで有名な当代有数の学僧で著書も多い。正徳元年十一月十日 死去。六十七歳。安西の入寂は宝永七年（一七一〇）、忍激没は正徳元年（一七一一）であるので、安西の物語はまたたく間に京都に伝えられたことになる。そして、忍激の遺志を受けて門人の龍河が『往生記』を調製したのが正徳二年ということになる。

龍河は本文末尾に「獅子谷門人 龍河」「書於觀智教院閑窓下」とある。『忍激和尚行業記』（享保一四年刊）に「江州彦根觀智院者獅谷門流之一刹也。前住龍河、現在淨月」「亦名、玄津」「稟性、強記。弁慧。凡書籍一聴。即成誦。亦通理義。因博涉獅内外二典。尤善倭文」とある。忍激の臨終に立ち合う。但し、『忍激和尚行業記』には、安西のことは記されていない。

この伊予大洲から、京都知恩院にもたらされた安西の物語は、白蓮社という忍激の学房で獅子谷門人龍河の手によって成文化されたことは事実である。そして彦根の觀智院で刊行の運びとなる。先に引用した跋文には、続いて、

其の国字を用ひは男女の輩をして読み易く解し易く、往生の信根を起し易からしめんと欲するなり。記成りて証を需む。

とあるので、仮名書きの往生伝が調製された意図ははっきりしている。

書誌を略記する。半紙本一冊、龍河編、無地うす縹色表紙、外題（刷左上、子持ち枠）は「豫州安西往生記」、内題なし、柱刻、丁附のみ、本文三十一丁、跋「正徳壬辰三月望日沙門覽光識于雒東獅子谷白蓮別坊」一丁である。末尾（後見返し）に、

右

安西法師往生記一卷獅子谷門人

龍河 欽承

先師忍激老和尚之願命書於湖東

觀智教院閑窓下

とある。

3 安西伝の出版 その二一山口長門・西圓寺、萩・報恩寺

『往生記』は、さほど摺られることもなかったのであろうか、正徳版は少ない。本来はそのまま汗牛充棟たる近世仏書の中で埋もれていっても不思議ではなかったが、文化十二年に長門の西圓寺と萩の報恩寺によって再刻がなされることで、再び注目されることとなった。

書誌は、半紙本一冊、布目茶表紙、外題（刷左上、子持ち枠）「豫州安西往生記」、内題「總譽安西法師往生記」、柱刻、丁附のみ、序として正徳版にはない「再刻安西法師往生記端書」（「文化十二年臘月八日沙門隆圓。洛東一心山專念寺の託静室にてこれをしるす」）二丁を加える。本文三十一丁。原跋の「正徳壬辰三月望日沙門覽光識于雒東獅子谷白蓮別坊」の後に「文化十二年乙亥十二月五日寂 長州 大日比西圓寺法洲／萩 報恩寺定仙 敬記」半丁を加える。正徳版の末尾「右 安西法師往生記一巻獅子谷門人 龍河 欽承 先師忍激老和尚之顧命書於湖東 観智教院閑窓下」を削除し、本文の最後に移動させている。再版であるので、挿し絵に異同、本文にも異同がある。

この出版については「再刻安西法師往生記端書」に詳しい。

安西法師愚鈍無智の身にして不可思議の往生を遂られしまさ。此書につまひらかにして。かの往生せられし。宝永七年庚寅といふとしより。ことし文化十二きのとの亥にいたるまで。すでに百とせあまり。六とせを過ぬれど。今なほ人の口に残りて。かたりつぎいひつぎぬるは。その徳の大なるがいたす所なンめれど。またこの書のしるしとすべきにあればなり。さるを天明の火に。此板もやけうせにしを。長門の国大日比浦の法岸和尚。ふかくなけき給ひしかば。その門人定仙上人同門の託阿上人等と相はかりて。おのおの衣鉢の資をはぶきて、ふたゝひ梓にはのぼせ給ひけるなり。そのことを遠くおのれに託し。このゆゑよしをも端書せよとのもとめいなめかなければ。その年月をかいづくるとて。さて思へらく。そも此往生極楽の道は。たとひ一代の御法をよくよく学ひぬる人なりとて。それによりてゆかんものかは。たゞわか身は出離の縁なきものと思ひ知りなば。ひたふるに本願にうちまかせ。念佛するほかはあらじかし。さらばいかなる智者学生なりとも。たゞ此安西を標準とし。かくのごとく投機し。かくのごとく念佛してこそ。めでたく素懐は遂侍りなんかし。たれたれもこれをよみ。これをきゝ得なば。こざかしき心をうちすて。たゞ平に助給へと思ひ。南無阿弥陀仏。なむあみだ仏とまうすぐせつき給ひて。いさきよく極楽に生れ給へかしと。思ふまゝをかいづけて。此書のふたゝひ行はるゝを隨喜し侍るになん。

文化十二年臘月八日。沙門隆圓。洛東一心山專念寺の託静室にてこれをしるす

文中の天明の火は寿永寺の火災を指すのであろうか。大日比浦の法岸は西圓寺住職。西圓寺は、本慶山天龍院で浄土宗知恩院直末寺である。法岸の号は円蓮社光譽、字は性如、「山口県寺院沿革史」に「特筆すべきは当寺三詩之伝是也。即ち法岸、法洲、法道の三上人は高徳学僧の三僧にして之を著述せる大日比三師伝に詳述あり」とある。延享元年生で文化十二年十二月五日没。七十二歳。すなわち、この跋文は法岸没後直後に書かれたことになる。この法岸の明和元年の遍路については後述する。

同じく定仙は萩市津守町にある浄土宗瑞雲山報恩寺の十三世住職（「山口県寺院沿革史」）で、『法洲和尚行業記』文化十一年二月の項に「廿三日より廿九日まで、萩報恩寺に於て別行を修したまへり。総て萩門中、師に法施を願はること、連々上に挙ぐるがごとし」として名前が見える。

託阿上人は法洲（ほうじゅう）のことである。法洲は明和二年、長州（現在の山口県）大津郡河原郷の中井家に生まれ、西圓寺の法岸について出家した。日課念佛三万遍を誓い、三經一論五部九巻を学び、京都転法輪寺、増上寺で学んだ。寛政九年には、香衣綸旨を受け、豊岡の来迎寺・大阪の大乗寺、和泉の西光寺の住職を経て、江戸に下り、増上寺山内の弁信の学寮に戻った。文化九年、法岸の命によって大日比西圓寺を継ぎ、周防や長門に勢力圏を広げ、一向宗門徒と対立した。後に羽島に配流となるが、翌年赦免。天保十年没。法岸の遺志を継いで、『安西和尚往生伝』を出版したはずの法洲であるが、不思議とこのことは『法洲和尚行業記』（明治十四年）にその記事がない。

隆圓は、「時に文化十四年六月五日託静室八一窓のもとにてしるし侍る 洛東専念寺沙門順阿隆圓」（『法岸和尚行業記』跋）や、「去年の冬（註文化十三年）、師の道友京師専念寺隆圓上人のもとへ、老師の行業記の草稿をおくり、其校合を請れしに、上人隨喜のあまり、速に開版し利益を無窮に施さんとて、今春しきりに師の

上京を促され、又受化の道俗も挙て上木を勧むるものから、二月十六日大日此を発し、沿道諸寺院の請に応じ、四月七日専念寺に著せらる」（『法洲和尚行業記』）などの記事から、洛東専念寺にあって法洲の出版を助けた重要人物であると思われる。

以上、長門の動きを時系列にまとめる。

法岸の伊予大洲訪問（明和元年頃）

→法岸の西圓寺住持（安永七年）

→正徳版『安西和尚往生記』の板木焼失（天明年間）

→法洲の西圓寺住持（文化九年）

→法岸示寂（文化十二年十二月五日）

→『往生記』隆圓序文（文化十二年十二月八日）、この時に出版か？

但し、法洲らの跋文に「此書翻刻未本師和尚示寂、弟子等遺憾之余」とか「回向」の文字が見えることから、翌年以降か

→法洲ら『正邪強会弁』刊行（文化十三年十一月）

→法洲、『法岸上人行業記』草稿を隆圓に送る（文化十三年冬）

→法洲、『法岸上人行業記』出版のために専念寺へ（文化十四年四月）

→『法岸上人行業記』出版か（文化十四年六月）

『往生記』の出版は西圓寺の代替りの事業として注意しなければならない一事である。

4 安西伝の出版 その三—江戸版・三縁山西渓竹叢軒

『往生伝』は、この後に江戸の増上寺周辺で出版され、三度注目されることとなる。今、もっとも普及しているのはこの江戸版だとも言われている。しかし、この江戸版は、正徳版と文化版にあった「右 安西法師往生記一巻獅子谷門人龍河 鈎承 先師忍激老和尚之顧命書於湖東 観智教院閑窓下」を削除し、さらに文化版の隆圓序文と法洲跋文を削除している。代わりに、

這伝也。顯仏願不思議於末運鈍漢。遂往生一大事於檢使目前。棠淨業者流之左巻也。憾其板以遠在西國、東方士庶未知有此奇跡者許多矣。因今茲天保十一庚子夏六月更鋟于梓以授同志。

三縁山西渓竹叢軒藏板

という跋文が付される。白蓮社忍激の権威は称えるものの、龍河は名のみ、長門の法岸・法洲は名さえ記されず、「其板以遠在西國、東方士庶未知有此奇跡」と一括されるのみである。注目すべきは、江戸版がこの安西伝においてもっとも評価しているのが、すなわち「城主からの檢使役の前で、往生して見せた」という事実である。先に述べたように、この江戸版が出された背景は、武士を証人として極楽浄土の実在を証明しきったという論理が江戸にまで広がったのである。そして、この作品が遠く西国にしか流布していないので、江戸版を作ったという通り、結果的にこの作品は全国で読まれるようになった。

西渓は不詳。竹叢軒は、同名の浄土宗寺院が港区芝公園に現存する。この竹叢軒が、西渓の居た処だとすれば、すなわち近世期に於いては増上寺の支配内にあったと思われるが、いわゆる増上寺の子院にその名は見えず、明治二十二年の増上寺編『武藏国所管寺院調簿』にも名が見えない。またこの江戸版は評判がよかつたらしく、嘉永元年になって、その再版が出版される。竹叢軒版の跋文一丁を変えたもので、「因今茲天保十一庚子夏六月更鋟于梓以授同志。嘉永元申年初夏再刻 三縁山西渓竹叢軒藏板」とある。

5 安西伝の出版 その四—伊予大洲

大洲寿永寺蔵。安政六年が安西の一五〇年忌にあたるため、その前年に刊行。板木が大洲に残されていたが、腐食したため、昭和十六年に、複製が出される。ちなみに、この大洲版は希観であつたらしく、伊予史談会は昭和七年、横田伝松氏蔵本による写本を作成。原本は確認できていない。全くの異版。

6 「巡礼の図」か、「遍路の図」か。

前置きが長くなったが、この安西の『往生記』は出版地を変え、およそ近世期から近代初期に至るまで出版されたロングセラーである。そのロングセラーの冒頭を飾る挿絵を今回問題したい（図版）。

この挿絵は何を描いたものであろうか。これは所謂異時同図法なる手法で、下は安西が俗人である時に漁師であったことを描いているのである。とすれば、上図は、

母七年の忌辰を迎へ、まづ其遺言にまかせて。四国の靈地を巡礼し

に対応するに相違有るまい。安西は三十四才で母を亡くしているので、四十才で巡礼したことになる。安西は宝永七年寅の歳（一七一〇）に七十一歳で没しているので、延宝八年（一六八〇）がそれにあたる。

ここで大きな問題が生じる。この図は「四国靈地巡礼」、「遍路」の何れを描いたのであるか。まず服装に注目してみる。手に「杖」を持っている。背中には「笠」がある。「笠」はないように見える。強引に解釈すれば「初期遍路」の姿だと言えなくもない。しかしながら、これは普通の旅装であると強弁することも可能である。

道についても同様で、この稚拙な図から「遍路道」「普通の山道」の両方を強弁することが可能である。

本稿では、ただ本図を提示することを目的としている。しかしながら、急ぎ断つておく必要があることは、本図は初期遍路の姿とするには慎重であるべきだ、という一点である。無論、本図が初期遍路の姿であるという可能性は大いに残るのだが、それでも慎重に扱うべきだと思う。

但し、大洲寿永寺では、いまだに安西往生の絵解きが為されている。その絵解きでは、本図と構図を同じくした絵の解説として「四国遍路」が明記されている。寺伝の扱いは筆者の力量の及ばない所である。ただ、寺伝として「四国遍路」と語られる事実を報告しておく。

7 長門西圓寺の法岸の遍路の諸問題—安西伝の余波—

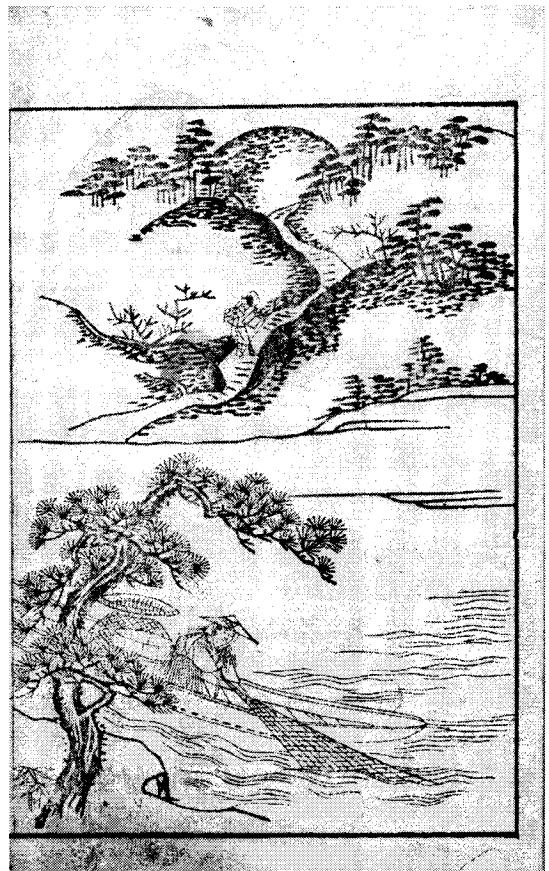
繰々述べたったように、『往生伝』は処を変えて長らく刊行され続け、読まれ続けた。当然ながら、その読まれ方や解釈にも変化がある。先に問題とした安西の「靈地巡礼」をただちに「遍路」と解釈した人物も多かったであろう。その人たちにしてみれば、先の挿絵はまさしく「遍路」の姿と理解されたであろうし、その道は「遍路道」として把握されたであろう。

その代表が長門西圓寺の法岸である。法岸が安西を慕っていたことは前述の通りであるが、彼は敬慕のあまり四国に赴いた。

師二十一歳の早春、江戸をたちて（中略）猶四国八十八ヶ処を巡らんとて、四月中頃、備前の國より四国にわたり、
（『法岸和尚行業記』）

二十一歳があるので明和元年頃かと思われる。ここでは「四国八十八ヶ処」と明記されているので、法岸は「遍路」をしたことになる。すなわち彼は安西の「四国靈地巡礼」をただちに「遍路」のことだと解釈した人物だったのである。以下、彼の「遍路」の様を『法岸和尚行業記』から摘記してみる。

伊豫の国岩屋寺に至り、二十一のはしごをのぼるとて、既に捨身せんとせられしが、さはりありて其おも



ひを遂られず、

彼は伊豫の岩屋寺に来たときに捨身の衝動に駆られたという。続いて、

経回の内に、種々艱難の事多かりし中に、所も語られしかど忘れたり、前後七八里斗の、人はなれたる所にて、癩病をうれふる夫婦の者に道づれとなりしが、

とあって、癩病をうれふる夫婦と道連れになったことが記される。癩病患者と遍路との関係については、重要なテーマであるので注意しておきたい。特に法岸の場合は、夫婦ともに癩病であったのか、もしくは片方が癩病であったのか、両様の読みが可能であることも留意しておく必要があるであろう。

彼はさきにも巡りて、土地の案内をしりたる者なれば、予に告て云、「是よりさき人家ある所までは、三里斗もあるべし、さるを日ははや七ツ下れば、彼處までは至りがたし。野宿するにはこゝよりよき所なければ、師も我々と共に憩ひ給へ」といふ故、其すゝめにしたがふに、彼等は薦包の中より、土鍋を取出、もらひ置たる麦粟のたぐひを谷水にあらひ、爪木ひろひてこれをかしくに、予は一粒のたくはへもなければ、あたりの椎柴折しき、念仏してありしに、癩人の言、「師は旅なれ給はねば、兼てのそなへましますまじ、いざこなたへより給へ」とて、己が古くかけ損じたる椀に、彼かしきたる飯をもりてあたへけるが、

癩者夫婦の遍路は今回が最初ではない。対して法岸は初心者であった。その差は、食器を持参するかしないかの差でもあった。遍路については近代まで食器を持参する慣習が残っていた。この記事は癩者夫婦の旅慣れた様子を記しているのだが、そこから癩であるがゆえに複数回の遍路、癩であるがゆえに食器持参、というような事情を深読みできる余地がある。

かくて七月十四日伊予の国、安西和尚の遺跡、本誓寺にいたらる。兼て法師の、単直仰信の行者にして、大往生を遂げられたるを、深く仰慕せらるるが故に、一両日此処に留錫して念仏せらる。

法岸は目的の本誓寺に到着した。ここで注意しなければならないのは、本誓寺はいわゆる八十八箇所ではない。それにも関わらず、法岸が本誓寺に到着する記事を「かくて」という繋がりかたで記述してしまうことである。法岸にとって八十八箇所と本誓寺訪問はセットであって、そこに異質性は見られないようである。それはすなわち法岸にとっての安西の「靈地巡礼」とは遍路であるとの理解があったのであろう。

本誓寺には先客がいた。

然るに師よりさきに、走西そうさいといへる隠遁の上人、此寺に留錫ありしが、同氣相もとめ、同病相あはれむのならひにて、師と発心修行のやうなどかたらはるゝに

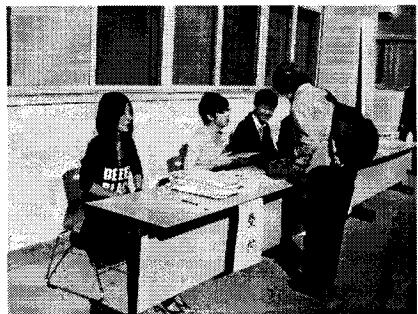
この走西の遁世の理由や本誓寺留錫の理由については不明であるが、同氣や同病などの言葉から想像を逞しくすれば、彼もまた安西を敬慕した人物ではなかつたであろうか。安西の物語は全国に広がつていたのである。

8 終わりに

安西の物語は、版本として近世期に流布し続けた。その段階で法岸のように「靈地巡礼」の冒頭の図をただちに「遍路」とだと了解した人物達は相当数存在したであろうし、大洲寿永寺では「四国遍路」と明記して絵解きされている。その意味では、『往生伝』の挿絵は、たとえその制作者の意図とは異なるにしても、遍路を描いた初期の絵として認めてもよいのかもしれない。

しかしながら、全く逆の立場もあり得る。この挿絵はあくまでも「四国靈地巡礼」であって、遍路の姿と決めつけるのは早計であるとする立場である。

本稿では、その両者の立場を認めつつ、今後の議論の呼び水として、『往生伝』の流布、遍路との関係を提示したい。当該図の掲載を以て責を塞ぎたいと思う。



受付



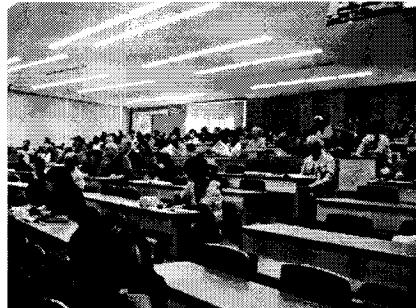
柳澤康信学長挨拶



イアン・リーダー氏講演1



イアン・リーダー氏講演2



講演会場風景



D. モートン氏報告



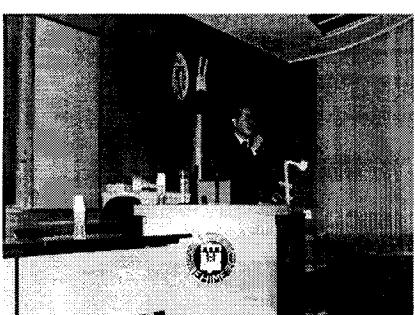
内田九州男氏報告



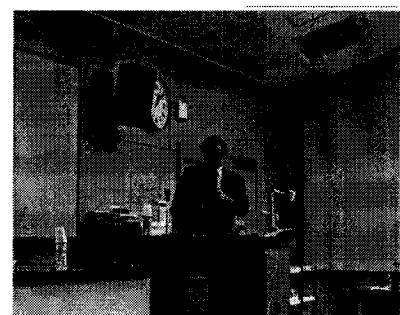
福田安典氏報告



コメンテーター諸氏



浅川泰宏氏コメント



竹川郁雄氏コメント



内田九州男氏コメント